

Title	京都帝國大學經濟學會第二回講演會記事
Author(s)	大森; 汐見
Citation	經濟論叢 (1920), 11(5): 702-703
Issue Date	1920-11
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/127715">http://dx.doi.org/10.14989/127715</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第

卷一十第

## 論 說

歴史と社會學との關係(一)……………法學博士 財部 靜治

地方税としての地租の課税標準……………法學博士 神戸 正雄

限界的生産力の勞賃說……………法學博士 田島 錦治

農業社會主義的土地改良論者……………法學博士 河田 嗣郎

價值論上のリカルドとマルクス(二)……………經濟學士 堀 經夫

## 時事問題

北支那の飢饉……………法學博士 戸田 海市

## 雜 錄

濠太利の貿易と海運……………法學士 小島昌太郎

徳川時代に於ける農本の意義……………法學士 本庄榮治郎

將來の産業的指導者としての日本及び其他の諸國……………法學士 石川 興二

京都市經濟學會第二回講演會記事……………法學士 大森 研造

國大學經濟學會第二回講演會記事……………法學士 汐見 三郎

保險に關する新著紹介……………法學士 小島昌太郎

神戸、山本の諸教授を始め、學の内外を合して無慮四百人に上り、頗る盛會であつた。

田島教授簡單に挨拶を述べ、經濟學會の過去及び現狀を説き、其前途の洋々たるを思はしめた。

次に山本教授「余の觀たる尼港及北樺太」なる題下に登壇、サイベリヤに對する露國の雄圖、多年にわたる露支兩國の交渉、ムラビエフの罪囚植民地の昔を偲び、尼港の經濟的價值、所謂尼港事件の真相等を巨細明にし、更に進んで尼港に對する將來の國策の樹立に對し獨自の見解を述べた、次に尼港の對岸北樺太にうつり、其地勢、富源、交通に就き詳細なる説明を加ふ、其間約二時間、聽衆は植民政策に關する最新の智識に接したのである。

三時十五分田島教授登壇、「滿洲の夏旅」と題し旅行談を試む、往年の冬旅と比較しての興味深き經濟談であつた、滿洲の製鹽業より鹽專賣の可否を論じ、長春の放射線狀の都市計畫、奉天の高梁酒、陸稻水稻の比較談、食糧問題解決

## 京都帝國大學經濟學會 第二回講演會記事

十月二十三日午後一時十五分より、經濟學會第二回公開講演會を法學部大講堂に開く。來會する者、荒木總長、岡本事務官、坂口、田島、

策としての粟食獎勵、紡績工場燐寸工場に於ける男女工の就業狀態、苦力の生計費、大連撫順の勞働問題等の諸題目にも及び、教授獨特の諧謔百出滿堂の聽衆を酔はしむ。

四時二十五分神戸博士の講演「地方税としての地租」に入る、地方税改革の聲高き折柄、學問上實際上頗る緊要なる問題である。先づ地租が地方税として如何に重要なるかを財政理論の上より説き、而して地方税としての地租は附加税よりも寧ろ特別税の形式を採るべき事を明にし、更に課税標準の問題にうつり最近の學說たる純收益説と資本價格説とを比較し臺帳制度と近實制度との差異を紹介す。而して純收益説よりも資本價格説を優れりとし、臺帳説を棄て、近實制度に就かん事を主張した。結局地租は國家の手より地方團體にうつすべく、而して地方税としての地租は特別税の形式を最も優れりとし、其課税標準は近實價格に之を求めねばならぬのである。

五時三十分田島博士の閉會の辭にて散會、近

來罕に見るの有益なる學會であつた。(大森、汐見)